寛暦四年

中村俊定文庫
文庫 18
327

# 北梅社詩集

序

為父北梅社者佑六十余翁。年為
発句ひねもす机上ふる。予奉約かやと
ゑつ祈申ける。父若て知友義島
月雪を吟ずと問る時贈るの備也。
その余八獨座悠然として。頃ふ句八
日の出を待るハとさしもの又遠塔の
求手意ちん少ハ。いつまで拾

市村侯定文庫

いつれを撰ひんやくるとて四季の
わうち見れたる百句小冊ぬ小冊ぶ
ゐし是よ懐きぬるに形く老ぬ
まゑやうよ糸の一字書筆序年。
形百ゝ七の壽と彫ふものゐ〳〵

三月 化海書

春

梅　門杏　弓始　寶船　初湯
若菜　常陸帶　小松引　杏花　霞
弾初　初巳　鶯　若夷　柳
野老　白魚　海苔　春雪　春雨
春風　土筆　初午　鳳巾　雉子
芹　摘艸　蒲公　貝寄　苗代
椿　椄木　蕨　蝶　蛙
暮遲　花　櫻　櫻鯛　桃
雛　上巳　汐干　蠶　董
山吹　鄭躅　藤　三月盡

## 夏

更衣　卯花　新樹　若葉　若楓
牡丹　杜若　時鳥　佛生會　初茄子
櫻實　初鰹　花柚　袋角　夏木立
菖蒲　幟　梅雨　五月雨　今年竹
葭雀　紫陽花　早苗　螢　蚊
蝸牛　麥芥　帷子　茨花　橘
鶉　心太　蓮　蟬　夕顔
汗拭　眞菜瓜　扇　團　暑
涼　白雨　清水　雲峯　虫干
炎天　鷹羽遣　夏神樂　夏河原　晩夏

## 秋

初秋　七夕　葬　生身魂　靈祭
踊　西瓜　刀豆　萩　露
女良花　蜩　蘭　蕃椒　蓮實
茗荷花　蓑虫　赤蜻蛉　八朔　薄
月　放生會　初汐　鳶　砧
葡萄　千生　玉芙容　露艸　鳶
虫　蚯蚓鳴　鹿　花野　千種
鷄頭　稻　煙草　秋田　夜蛤
綱代打　茶山子　菊　十三夜　梅嫌
新酒　紅葉　色昏松　御迂宮　暮秋

冬

時雨　木枯　連広忌　茶花　山茶花

鷹　落葉　大根引　枯野　夷講

千鳥　水鳥　鴛　群鳥　寒

冬篭　枇杷花　霜　石蕗　鰒

寒菊　炭　顔見勢　雪　玉子酒

藥喰　氷　水仙　鉢扣　煤拂

衣配　寒梅　寒垢離　除夜

雜

懷旧　哀傷　歳旦　歳暮

梅　春之部

神祇

深てい爰起てい加護を梅の花

ゆ　ゆ　ゆ　初日小梅の花表　茅

梅さゝや神のすゝの柘木賛

ゆ　ゆ　ゆ　八百五十やとゝの年よ叶ふ宇神の梅

ゆ　ゆ　ゆ　花ゆめ宇知の風ゆ太ゆゝ里

万句満尾

帥の芳ゝ梅のひゝや吾妻乃

かゝゝて紀の紀合新宇梅の苔

なのこゝ野ゝゝ孫元沾や梅が花

梅ゝ雪宇乃彩ハさゝて九日癸

庚申は梟ハあきゝの梅乃蕚

春咲や机にかれのちらし書
梅ゝえやなくて叶ふ曲り矩
ちるてふ不化をとるまして梅の花
門松を潜るみちの果乃梅
人音のうしろ中ゆさよ梅の花
梅枝や加ぐ祝ふ黄ばれす
鶯沢よ梅ゝ別除の露見ぶ
黄うまはくおよハんね梅の花
ゐ梅や海苔ゆ解さぬ
門雲や傘ハちらよひ花ゝ祭

崔見橋
外竜梅

門松

弓始
寶船
初湯
若菜　崔ヶ岡

松ゝれて目小曙のちらめこの南
巻菜のはゆりて春姫原ちらめ
宝船ゆ梅ゝ井ゆまりの沙よ原
春秋をれ呂よ富ゆ日ゆ殺
摘若菜神の雨前の雪ゆ下
よ下て若殺ゆうえよ若菜つゝ
ゆま雲や原起ゆちるし若菜摘
拐小水よゆれ雪るのゆるこの拐
七種と三絶ゆちる夢人ぶ
七種やチゆ二ゆゆあけてを

百姓乃よはの節見るつゝ菜ぶ

題記節

清水知の傘ハ沾七ゝ雪　芝秋

常陸帯

野賀よりぬ元ふしやひら帯

小松引

小雲汀猫も鼠もうけがゝし

松花　神祇

ゑゑしやすや松をゝ年小チ春

幸もこがれものの匂里書の法

霞

くものもやゆて目鏡の初霞

題四橋

川節の丸ちハ淀源氏兩加多む

弾初

ゑき初や玉ゑの出ハおりさんせ

初巳　瓢草劇

岩穴とみる出掛ハや初巳待

鶯

鶯や業平作よほれもせす

うゑひ留やさゝて呼ゝぬ人ハの湯

鶯や枝をゝ匂きゑれ身

ゝくいすゝゝ孫見目の彩つき

守ます初ゆき匂ひの使る柏

別ゝ第かくて余りやさし柳

屋根やきの階子よまふ柳ゞ

元船とすもゑとハやゝきゝ仏

思敬ハ見ゝきとそも柳この南

白魚の箒ゆゝ化やゝきゝ

野老　吟井戸よりはくるるげをさし柳

白魚　はく〳〵ハ蒼さぬ雨の中のさゞ

堅蓋出て又うきかてる舟をさゞ

白魚や形変よりる舟たるゝ

海苔　白うとや酒し剣際のすみさい

春雪　青海苔の点〻祢よくるむ年房ゞ

春雨　心願　何の水〻見ん郷ハはや〻春の雪

さけるかもき天海ワ音も変ける雨

春雨やかゝるよ生れ琴碁出画

もるゝ雨や蘇鉄の孤ハ解ゝ中

春風　虎の賛　題蕉翁

土筆　出ゝ蒼ハ雨よ眠の尾尾ゞ

初午　ゑ坂ゝ袋を出ゝ春の水

さち手ハ居ゝ節やはゝくゝ

馬の歯て蚕ゝ蛇皇の古ゑ

初午や苔赤旗日ゝ茶

もゝ午やるよゝ紅れて中歩り

初んまゝ必ゝ方ハゝ雲

初午や琴の師匠ハ隣裏

もゝ午や俗馬のもゝし稲の光

初午や餅の粉はたく炉の煙
ちゝんぽむらの鏡ハ皆子供
初午やかざす扇の指ぬひ
初午やとゞく奥座の朝日和
ちゝんぽや穴うてし引かゝみ
初午や松て茗荷る女の子
初午や机よ千種　桃も赤
喰初の階のむらさきのはな
俤の市ゝよはなるむ姉子の色
芹つゝさゝへ菴主のとり乃

鳳巾
雉子
芹

恐ケ岡

はみ菜さゝ森ひらゝ和たり
ちんぽや大百姓のいはき
貝ゝもの尻や七里の虎桜嫁
苗代よくゝ立ちし　大　鈴
つよき葉ゝ葉ゝ花の椿ゝ
鞠のゐる庭手和当の接木
俤入ゝ乃ゝ少口けて鬼苔
人ゝれてゝ乃ゝ立れ胡蝶
青空ゝ黄色手わる蝶の
ゝゝゝ乃の城の白ゝ乃ゝ小胡蝶

橋艸
蒲公
貝寄　賀
苗代
椿
桜木
茄
蝶

多武峯ニテ

蛙

枯られす春よまはるれすゑの松塚
杉ケ根の田へさし出る蛙うな
り庵へ杖ハ面きて蛙う那
雨雲や苔の中奏りて写蛙
流れ水へ行手をうける蛙じ
苔るたそし今の月ハ日ぬさう

暮遅

九十賀

白山奉納

花

ゆうけや楊枝と花の元寄
十七秋ちらて苔や講仲る

上野清水

惣評

兼鳥の声苦も今や朝きよめ

百六ッ賀

今年や百貞余真苦さう

櫻

八幡奉納

遅ふけも拾ふや苔の麦寄蓋
京千似さ夕めしまや花の人
遅ハ人よりをかこつけて花ゑび
雪まこもよりん笠ハ拾をけ苔盃
文正う年も拾ひて花さう
初屋ハ河戸ゆう多苔の山
似菩薩の初よ訂かし花盛
蒸籠とはむ苔ゆかれ苔ゑび
四う屋万豆腐きれう巻の山
擂色と兼てぎ男山さう

題飛鳥山

杖女がき御代の孫子山桜
蛎くハいつの頃そや山さく社
りふんずハ足非よ飛鳥の山桜
短冊ハ今中心きえ兎糸さら
おやしハ枝よ粉をふくさく花ど
しられ句くる子供よよめて山花の花
杣の食まさるくと供山さくら
押鐘も桜ハいみし浮世の
あの巾緒かりよ御覧の乾さら
弁慶ハノの説もよし地山桜

櫻鯛　題兵引

新桜の賛

桃　江の鳥

人丸千年忌

雛

辻番の引きる初れそ山戸九言
山人のくふハ尺ぬりさくら信
しなよ赤きはうきし桜鯛
信清きこうの鴻根そ桃の花
待まうけ妹くり来れい桃の若
やせの京呂づましや桃の花
穂らハ拾へどうふも桃乃花
雛立て小丸の图ハなりくり
天井よ嵐の花や雛まつり
しき事の瞳ハかし雛祭ひ

雛の節句

雛とし旭手ゆゑ雛の邦

かしらの立居ぞまかし雛祭り

雛しつや母の心い鬼子母神

かし庭桜実も已の日は祓うる

曲水のたもとうはやむし唄

流出家は月八もく汐干潮

汐干潟今日三味線はしまし浜

乳香子はさうする連れ汐干潮

汐干うるせめても海士の墓糸

上巳　天養納

汐干

蠶

董

山吹　宇治

躑躅　旅行

藤

三月盡

もよ掘る奥を点汐干潮

賜の女は切火よはし香棚

もんを出咲ける第鶯や紫緒

蕗苔するれのもるやつか董

心吹の以や入日の巻　桂

山ふもるや孫つ波い遠ら下

松とのこ咲し麻鴻の咲しど

黒塀よ中刺の世や茂の花

ちちうう皇毛とのごもや茂の柳

彩春や別れし小田の掘惜ミ

更衣　夏之部

ひつい茶よさそるや下馬の初袷

卯花

卯の花や雪ふるまでの花卯木

卯の花や雪ふるまでの花卯木

逸別

卯の花や雪ふるまでの花卯木

新樹

下闇やつくつくしつくつくしの

若葉　糸宮

神路山おろそ踏も若葉ぶ

旅行

鶯の糞かれそ古歌の若葉ぶ

露のまぶ玉を作るや若葉ぶ

若楓

歌舞の枝ちるしやぶ若楓

牡丹　二見浦離

ひよ浮くやこ二見の海月白かしん

あるちるに膝ちのを玉牡丹ぶ

ちるちるは酒の酒ぶ白牡丹

さのころの旭のちゆきかしんぶ

糸合ハかつて叶ひぬ牡丹ぶ

連ハはるるるるる梨　杜　美

ひひ面よ面ちかひひ杜若

ひひよ伊勢茶碗よ扇屋ほとぎす

雲をつるむ蛙ちちち時鳥

公時のせれて山保ぶきん

杜若

時鳥

天さうる松さとも宇時鳥
保〻しきん投ハ松ん老角カ
年よりそゝ〻ゝ時多大井川
星かゝ〻行あも富士保〻きす
大判をえぬ里も平一時鳥
荒波もちつまる荻ゆり社宇
ちかまぬ帝の名称や蜀魂
ゆ〻そふ名お碁せいも〻時鳥
東西の天とゝけゝ保〻きす
灌仏や卯乃苦書き行柄杓

佛生會

初茄子

櫻實　吉水院

尊師ノ縦

初鰹

未の世も卯月八日の天氣ゝ邪
根多句〻ゝさ〻ゝ祭せむ初茄子
よし飛ゝ形玉〻四〻ます機の実
みごさ〻ゝ拾ん玉乃さ〻ゝのこ
もゝかき酒ハゝゝる　初鰹
大名の駕の細ん〻神ゝを
出はよさむへ山瓜よ初ゝを
下部へいちゝて〻ゝ初鰹

花柚

又ひ〻ゝつ句〻ゝかも九花柚ぶ

袋角　南圓堂

奥節の棒をよけゝ袋角

夏木立雜司谷　おさめ鶏頭四つ　夏木立

菖蒲　はつ〻ら菓をこのやまの彩菖蒲

題中節　美い時誰も助六花あやめ

菖蒲　菖蒲　菖蒲　菖蒲　菖蒲　菖蒲　菖蒲

幟　初幟いくつも妻は表藝

得野氣より級ハ保ぬく幟ぶ

一子儲て　祖父母の幟ハ町家の幟ハ

梅雨　初幟今こそよしも　地英　九

太刀奪ひ明ま迄る端午ぶ

さつぱりと入梅ハ明ぬ夜の扉

五月雨　明後よ入梅ハ上ぬり我るゝ色

旅行　さみれや枕乃義理ハ茂の時

夕見坂てさつきの晴ぶ

五月雨や　さ〻ぶ花も咲栗毛

さみれや　ぶ月ハ明ぬ

思事有て　丈六の氣をさつきの光り

今年竹伊勢太〻　若竹の長ぬ彩端や神示迄連

竹生嶌　帆ハ長くに吹るよむく〻今年竹

神祇　つり竹や根のまわりもかく〻姫

竹や竹やさきのふハ気ぬ嫁の内

若竹や丸太の勢ひ口
つゝけや根つよきぬの清苔
芳竹の笹よりあるハ人うの郎
きけむ紅いさうひ色てきあゝし
あちさいや白羽三きれ青ミよそ
蚊とゆもむ書きて田うへ笠
面よさへうへさぼれて消ぬかるぐ
雛吹にや佛の法を教ハ蛍
粉きひの面ゆせるる蛍うの
くゆまもせる蛍の拝蚊風雨は移

葭雀
紫陽花
早苗
蛍
蚊

ひゝなの笹の笹うや蚊のたけり
神乃木よりしてゆ杉の蚊ぎうぐ
ゆちうぬ笹屋うもの蝸牛
麥苅や村ハ楠ア の客 魚、
雉子 紀伊国茶
雪ものや松の雪の浦の際上る
茨花 辻時雨うて色ぬ桜の蕊
橘 題楠公 本所自性院
橘や名し楠ア カ ケ
ゆちうぬのちうや解紐却落
鶏 行ぬハ移れよ蕊の蕊し方
心太 魚関よ踊しうこうてん

蝸牛
麥苅 伊勢
雉子
茨花
橘
鶏
心太

蓮　心願

二枝深ぬ目よさん蓮の朝　梶蟬

蟬

蛭乃俳　榾もち〳〵す　蟬の色

夕顔　題象

夕顔の蕊れて皇よちかゝ〳〵

汗拭

古文字深てもゝ也しけぬ

真菜瓜　題南都宝物

真菜瓜こゝ〳〵へひけどたゝ〳〵

扇

檜扇の実かつゝき時を

團　一圓相

極ホのかゝちハ丸きうちはゞ

暑

いさとノ日よはゑ中ひゝき暑ゑ

涼　三圍

くもをあたゝかゝ也も動ぬ暑ゑ邪

ちほこゝかゝ乳薄のあつさゞ

雨もれて石よゝりの暑ゑ

蝿ゝの初手宿りのゆはさゞ

乳母ゝ〳〵肥ゝはけぬ暑ゑ

四のまめ檜杭あきるゆつさゞ

ゆゝゝと居智てゝも暑ゑ

借し島の鍬と休ぬ暑ゑ邪

涼れ家も田中の隆由堂

涼しさよこよひい下司の一寸戸

うみ出る海士とゝめの涼ゞ

題加茂川

見ゝハ誰ゝ布まくて涼屋
能因ハ宗をおのゝすゝゐ

題兎

高波と人ハきゝぬ涼ゝ哉
高帆行帆毋ハもゝめて夕涼

秋の灯ハあくまて照て涼ゞ
端ゝ袴皆今佛ゝ寄すみ

白雨

白雨や松よかきゝぬお舍り

清水

伏蟹を祿よきゝ清水ゐ
ゐひつゝぬ人よ結ふ清ゐゞ

雲峯

筆ゝゐて小ゝゝ写ゝ雲の峯

虫干

虫干ハを山曇ゐかゐい哉

寒菌宗慶
貝君十

虫干や書物のゝ一を拾い寐
むし干や生蓋ゐして計仕事

炎天

明石
人丸社

庵住し茅いきれゐきゝ柱

鷺羽遣

羽巻ひハ鷺を目前のゝ哉

夏神樂

北野奉納

笠ゝよ笠ゝ結ゝ結思ゝ夏神ゐ
鹿島奉納

夏河原

拾石小便を飲て夏河原

晩夏

晩夏や秋寄出の先拂

初秋秋之部

廣袖とよかいまくらけ朝の秋
刷ぬぐひ秋の初風よん泥播

七夕

七夕や岩切色しほし月歌
糸桜ハのはりて白しなまの川
硯水こんのますや天の川
さてもこよひや星の蔦し紙
こるゆやせこうし船も星さよし
水さする角ハ清い中こ玉川
ほし合やこく石よ成るまて堀い中
七夕やさうしえくするハ比るゆ拍

夫よあ〳〵ハ地よりよし地やてのの川
うつうしきゆのるせすせ天川
那川や牛ハ月ふ石星こすし
あさりかやそ花と夢とは右ひう
鉦新や起ると母の抜ちくで
葬や女ちくえの荒し玄関
人さふ伊勢とつするゆ生身玉
祈拍ハ鉦ハ月の下生身玉
耳角ハ白くうもちし生身玉
鉦長ル苔の名ハ拍生身玉

葬

生身魂

靈祭

ひゝ井ハよしまくらも倉橋山
高山の僧ふけかゝくまつ
ゆむけて蓮も枝の甲 秋
杉しそる門、来ますや玉祭
中臣の祝ハ表や玉まつり
高灯籠踊て居る板の島ぐ

踊

秋すゝし格ゞ山しかる町 踊
新茶のくもとはゝ広てや茶おく
ひゝめ氣の釈父もなつて踊ゆ

西瓜 大攻切通

はしゝ茗瓜陽ハ春ず破西瓜

刀豆

刀豆之祝ぢまて伝の這入口
豆中やゝさ北の年へみゝれ萩

萩露

茶乃京ともカゝりや露の玉

扇の芝

あつもれゝうゆくまし乳代しよ芝の露
桔の京ふやまぎさはゝしき露の玉

女良花

女市芝ノ花や二八のよくゝ屋

蜩

日ゝゝゝや竹の林へ月もうけず

蘭

紫の香や留主と知て人出入

蕃椒 題猶妻

閨の秋よ明ゝみ身くやゝ留主

蓮實 平等院

蓮の実の乳ゝ法乃法堂ぐ

茗荷花 貴家にて

ふとさよ咲きそめの花茗荷

蓑虫

みの虫の啓音ハそるき下雫

赤蜻蛉 旅行

あかとんぼ陽ハ晴れて赤らんは

八朔

八朔や稲のゆうのこぬゝ面

薄

薄ちる風あれ〳〵ぬ花落

月

月功の茶碗あつ気ふの月

名月の月新麻よ馬さの呼しなし

はつつゝよ赤人るぬ月見る

始つゝぬ長石くよとる月見

者乃月入ぬハむつて藝 男

新月や叶ぬこ別の年向ん

名月や先ふて書の日新町

田乳の人振ゝ蓑ぬ月見ば

名ゝや能とこほして水さつこ

大はゝと孫よに身ぬ月見る

新月や古るゝ〳〵下戸よ候

明ゝや境の裏も天下 一

一ゝ赤の炎ハ頂れて炎の月

夕ゝる紙燭ハ入ゝ合はゝ

放生會

初汐　江の嶌

鴈

砧

葡萄

千生

玉芙容

露艸

蔦

虫

蚯蚓鳴

鹿

花野

千種　松葉ヶ谷兎子母神

鶏頭

稻　妙蓮山

煙草

秋田　矢ヶ天奉納

夜蛤

綱代打

紫山子

菊　湯嶋小居を移す

ぬぎ笠よりみ出て紫山子ぶ
乗よりやや神の下外栗菊
いつ見ても晩日ちすや菊化り
ひらそうにむらせ菊の下ぶ
笠ハ示に度々日ハつきく合
立そすす菊の茎屋の百花匂
よ八せぬりみんや菊の花
そうさす蕪よえんかようきく
鳳の下やい生れやきくの茎
下公蕪と古目よりけこやつかと菊

あい白をふて指おるぬくもきく
そ行くの名ハはよきけ菊の酒
きく菊やきくもあるはは浜人
陶のきくふ茶をはは月ふぐ
味噌氣なるく柚子の情切や十三夜
ぬるく笠のふふハ竹花十三夜
鳥芋ふふ庭ふふん十三夜
ふふふ豆腐と合点ふ十三夜
菌ひひきて、ゆ十三夜
山嵐ゆまふ裏刻ひ十三夜

十三夜

梅嫌

新酒 初時雨

紅葉

色替松 高野山

御迂宮

舟へひひ豆腐ひはきふ月
ふたかへひの医者若十三夜
句傳よ言ハはやなし梅すぎ
費之のむしはぬやんめすき
出ふふふ杜氏老てふの秋
除色ハよぬきもあるよ和泉ぶ
行秋をそめおしてや谷りみち
西りふ斧をわをふてふ和泉ぶ
色ふえぬ三鉢の松よ旭氣
於よぬる杉目の色や秋の声

はつきりと見分られて神路山
老の身ハ板を小そで時雨哉

外宮

暮秋　旅行

秋くれぬ孫さめの床や桂岩　同

身の秋や一字深の梅むし　北野

時雨　冬之部

さるぼうのきぬ蛇蟲よ艶や初時雨

蹄うく砂乃白さよ初ちくれ

くま笹の屋ハつきゝ初時雨

漕ぎて蓑く深宮ちる時雨

時雨ゆや森すた君の歌の新屋

木枯

十月の十日　時雨

風や吹れて紅の紫も入え

ふうしや岩戸の細ハ干さ作

達広忌

達ヶ岳や宮ハ細目よりけて冬

茶花　萬祭山

茶の花や見山門の市一義

山茶花

山茶花小かむる虫ハ冬の蔭

鷹　半田奉納

鷹ちゝ加護や半田の松ひ霧

見ぬ人ハ鷹ゝ寒く鶴ゝ

落葉　神祇

辻堂千ちきむし竹義家で

同

おりけて人丸くゝ後葉哉

三寶江の蓮よりはゝ三葉ぶ
芝浦の魚よ浜の茅の葉ぶ
鷺鳥家弼席よりぬ蓮葉ぶ
横ゝ這ふ解蟹の爪とひく蓮葉ぶ
牛車昇くもての蓮葉ぶ
魚籠よりはゝ隅戸塚の蓮葉ぶ
六味丸ちゝぬき鳴や大根引
勝浦ふ川よ大根の白さぶ
菖の葉のくゝ細と生大根
昇くうる新や枯野ゝ駒の足

大根引 聖天奉納

枯野

夷講

千鳥

水鳥

鴛

群鳥

寒

冬籠

俗よすゝる子の来かゝりて夷講
人別ハ医者ゝ呼よして決講
約束の名ばりよむゝふ千鳥ぶ
見し浜の音きけどや小秋千鳥ぶ
水鳥よんゝて積め松葉 松
ゝ鳥よふ小は宣う彩帯と堤ぶ
蓮枯て小ゝてぬ池の鴛さんぶ
かちむゝや雲とさはす貝の色
辻占の鳴ゝう彩て来ゝる
夷講ゝ火笠よ似ゝう彩籠

枇杷花

霜　神祭川屋

玄冬　鬼子母神

石蕗花

鰒

寒菊

炭

顔見勢

雪

日白奉納

初雪や名ゐるき山をゐぬ所

きの雪よさはらぬ椎の下枝哉

おつるない酒と舟ふして雪見ぶ

乳母うくるとゝ朝ハしらわけて雪九ぬ

乙雪やはゝ木のうふ角川煙

山くのゝ雪ゝ信ゝ久人の雪

初雪や桐の一葉の残るゝ

初雪ゝ仁王ハゝりをゝぬ乾

時雨ゝ庭や月ゝ白ぬゝ雪の蓋

初雪ゝやはりたし人の目ハら

芝のこうこうせこきと北雪の枝
初雪やるか森るとの日柄かな苔
籠の目ふこ成るや雪の津納
忘書のたてきとこよ玉子酒
海川や野山ハすけて茶喰
くもり勾き智恵の字や春雨
初り咲もつすさ白さよ水仙花
ゑつと来て任昊殷や弁こき
煤こ化や麿をのうきて神祐

玉子酒
藥喰
氷　妙見奉納
水仙
鉢扣
煤拂　神祇

衣配
寒梅
寒垢離
除夜

懷旧哀傷

深川長慶寺

晋子三十三回

紅葉子
慈父
尊師

世ふすり一言こうけ　衣配
一帰ハこ[illegible]こ[illegible]日分梅
寒垢離やるかはく桶の水こ
鬼こ成る夫の爲や追儺の釈
梅さすの釈まのいさみや太神宗
咲春と破れぬ子の芭蕉塚
ゆるや声も二つのみ字ぬすり
連翹や維摩の室よりたかし
ゑつこうきふはし墓のけ
たすうこおるの籠枕

独菴
亡妻
雪中菴
一鳩林
尊師十七廻
翁五十年
慈母

## 歳旦

きりくすの鳴くやとなりの打ちかぶ
俳諧師の実をかり那
ひつしきき新やえぬ世の友ふる
うきふさ人はとをの師走ぶ
老の秋星ひ〻物きは恵寺
石可思後のかりわたを田ぶ
亡念の数四を未初寄を仏
此雅すくうつきを智は吉書ぶ
ふ鶴の尾の要さちや年一男
幕引のちぬ此情やの春

智恵付
男子賀

百をとの機嫌やこつの朝
ふうふ五つ世ふ宮人や恵方
四の春生今日を祥を春
元日やれの扉へあむしろ
初夢や太ちをの羽日和
中刑ふゆろはや伊勢とふよ春
ひふつ中雪宰ふけてと新の変
ふのしみや命八視年の朝
八くの卦筮を苦や年ちめ
むつまき要八世くの親子等

年父の春
市辻宮年

歳暮

年もまた洗み川一木挽のる
掛乞ハ見る春を高一心
油炸鮒ハ細くも師走哉
石屯ハ庵と張窠や年の股
とのゝ羽も雪行年一の鳥ぐ
呼てやれ年はかげゝ鶴長
老らくや達者もとしの腦脳脚
くゝ一つの命ハ年と惜ゝ
蕨門息とかけ合人師走哉
行年の宝知る十屯紙人

北梅白羽ぶ吹し高
点ゝす封幣英銭あ
ぢめて紙ぬむ其慈なる
や生老あるや道二ッ
形ゝ相立ぶき千載
乃屋も淫のゝ

つまをせさらんや

新花形平砂

寶暦四甲戌年秋

書肆 江戸本町通三丁目 萬屋清兵衛

彫工 山口平八